

聖アンセルムス（St. Anselmus） と内村鑑三に於ける信仰と理解—— その言語学的研究

坂本陽明*

摘要

本稿乃是以基督教哲學思想家——聖安瑟姆斯（St. Anselmus 1033～1109）和在日本基督教思想家中代表人物——内村鑑三（1861～1930）的「信仰的理解」（Intellectus Fidei），並加上從語言學另一面的考察，來瞭解在基督教思想和日本思想的「信仰理解」，其啟發之差異為目的。

原為聖本篤會（St. Benedict Order）貝克（Bec）修道院院長 Canterbury 大主教的聖安瑟姆斯和聖奧古斯丁（St. Augustinus. 354～430）、聖多瑪斯、阿奎那（St. Thomas Aquinas 1224～1274）同為中世紀基督教三大哲學思想家。其並非只是信仰神的存在而已，並以理性的必然性來證明，所以以最早的神學者而著名。他的名言「Fides Quaenens intellectum」（信以致知）。他以「信仰理解」之語言，而廣為人知。

如以中世哲學「信仰的理解」的完成者來稱呼聖安瑟姆斯，則内村鑑三可被稱為將基督教溶入日本的傳統思想中來獲得了解的日本最偉大基督教思想家。

内村將武士的精神，近代日本的文明思想（接受歐美的思想）及基督教精神予以統合，以一近代日本的典型日本人來創立日本的基督教思想而為人所知。

本稿之研究，如能幫助來瞭解日本思想的話，則甚感欣慰。

* 作者為本校東語系講師

一、本稿の目的

本稿は、キリスト教哲学思想家聖アンセルムス（1033－1109）と日本に於ける代表的キリスト教思想家内村鑑三（1861－1930）の「信仰の知解（理解）（Intellectus Fidei）」について、言語学的側面から考察を加え、以てキリスト教思想と日本思想の「信仰理解」に於ける発想の差異を解明することを、目的とするものである。

二、予備的考察

言語学的考察に先立って、聖アンセルムスと内村鑑三についての若干の予備知識を提示しておきたい。

2.1 聖アンセルムス

聖ベネディクト会ベツク修道院長でありカンタベリーの大司教となつた聖アンセルムスは、聖アウグスティヌス St. Augustinus (354－430)・聖トマス・アクイナス (St. Thomas Aquinas 1225－1274)と共に、三大中世キリスト教哲学思想家の一人として知られ、神の存在を「信仰（fides）」によってだけでなく「理性の必然性（rationes necessariae）」によって証明した最初の神学者として、著名である。

中世ヨーロッパ哲学思想は、キリスト教思想に指導された時代であったが、その中心課題とされたものは、「信仰と理性（fides et ratio）」の関係の解説にあつた。エティエンヌ・ジルソンは、「中世哲学はキリスト教の啓示を指導者として、啓示の何らかの認識に至ること、即ちこの啓示の知性による理解を求めるところに、成立したものであった」と述べている（注1）。「本体論的神の存在証明（Ontological Argument）」として知られる聖アンセルムスの論証は、その結晶といえるものであつた。聖アンセルムスは、かかる神

注 1 E. Gilson, *The spirit of mediæval philosophy*, translated by A. C. Downes, New York 1940, 5.

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける 信仰と理解——その言語学的研究

存在の論証をその著作『モノロギオン (Monologion)』『プロスロギオン (Proslogion)』で展開させた。さらに、信仰に知解を与える理性 (ratio) の根拠を探求し、その中心概念に「正しさ (rectitudo)」を据えさせるに至らせた（注2）。

聖アンセルムスの「信仰の知解」は、テルトリアヌス (Tertullianus 160—222) によって提起されたように「不合理であるがゆえに私は信じる (Credo quia absurdum)」という定式をとらず、「理解するために信じる (Credo ut intelligam)」という定式をとつた（注3）。聖アンセルムスの出発点は信仰 (fides) に端を発していたが、理性がどこまで信仰内容を理解しうるかという点については、彼はほとんど限界を認めなかつた（注4）。彼は、『モノロギオン』と『プロスロギオン』で、聖書の権威に一切頼らずに「理性の必然性 (rationes necessariae)」のみによって「神の存在証明」を行おうとし（注5）、『クール・テウス・ホモ』においても、キリストの存在を前提としないで「理性の必然性」によつてのみ、キリストの存在を立証しようとしたのである（注6）。

彼は『クール・デウス・ホモ』の中で次のように述べている。「非キリスト者は信じないから説明を求めますが、私たちは信じるからそれを求めます。しかし、私たちが求めているものは一つで同じです」（注7）。聖アンセルムスは、あくまで「信じる」という行為の直接的な主体は知性であること、即ち「信じる」のは「知性」であることを強調した。「信じる」と「知る」とは、同一の能力（知性）に属する働きであり、具体的な探求の営みにおいては一体である。そうであるからこそ、いまは「信」じられるにとどまっ

注 2 R. Pouchet, *La rectitudo chez st. Anselme*, Paris 1964, 15.

K. Kienzler, *Glauben und Denken*, Freiburg 1981, 143.

G. Söhngen, *Rectitudo bei Anselm als Oberbegriff von Wahrheit und Gerechtigkeit*, in: *Sola Ratione. Anselm Studien für F.S. Schmitt Zum 75 Geburtstag*, Stuttgart 1970, 71—77.

注 3 St. Anselmi *Opera Omnia*, Vol I, *Proslogion*, c. 1, 100.

注 4 稲垣良典「信仰と理性」、(第三文明社 1979)、111頁。

注 5 St. Anselmi *Opera Omnia*, Vol 1, *Monologion*, Preface, 7.

Ibid. *Proslogion*, Preface, 93.

注 6 Ibid. Vol II, *Cur Deus Homo*, Preface, 42.

注 7 Ibid. 50.

ている諸々の真理が、「探求（quaestio）」を通じてしだいに「知解」され、やがて「直視」されるに至るという希望を、成立させ得るのである（注8）。聖アンセルムスはこう述べている「理解（知解）は、信仰と至福直観（見神）の中間に位置している」（注9）、と。

2.2 内村鑑三

聖アンセルムスを中世哲学に於ける「信仰の知解（Intellectus Fidei）」の完成者と呼ぶなら、内村鑑三はキリスト教を日本の伝統思想の中で咀嚼しながら「知解」していった、日本に於ける最大のキリスト教思想家と呼ぶことができる。

内村は、武士の精神と近代日本の開化思想（欧米思想の受容）及びキリスト教精神を統合させて、近代日本における典型的日本人として、日本のキリスト教思想を構築した人として知られる。

内村のキリスト教との接触には、はじめキリスト教を通して新生日本のリーダーたらんとする動機があったが、彼はその初期の動機にとどまらず、キリスト教信仰と日本人であることを両立させる為のキリスト教信仰のほり下げを行い、今日の日本のキリスト教信仰の基盤を確立させたのである。内村のキリスト教受容のあり方は、日本のプロテスタント教会のみならず日本のカトリック教会の信仰理解のあり方をも規定させるに足る影響を、与え続けている。

本稿で、聖アンセルムスの「信仰理解」に対比させるのに、日本の代表的キリスト教思想家として内村を取り上げさせた所収である。

2.3 両者の関係

内村と聖アンセルムス、両者の間の関係を示す資料は文献学的には見当らない。内村自身の著作の中からも、聖アンセルムスに関する箇所はほとんど見当らない。内村は聖パウ

注 8 稲垣は、この範例を聖トマスにも該当させている（稻垣、前掲書、155頁）。

注 9 St. Anselmi O.O, Cur Deus Homo, commendatio, 40.

聖アンセルムス（St. Anselmus）と内村鑑三に於ける 信仰と理解——その言語学的研究

口（St. Paul 1頃～60頃）や聖アウグスティヌスについては、折にふれて論及しているが、聖アンセルムスについては多くを語っていない。何故か。これは、聖アンセルムスの名が「信仰と理性」との関係を論じる思想家として定着しているところから、内村の信仰的思索の中心テーマとならなかつた所に由来しているように思われる（内村は、聖トマスと共に聖アンセルムスを、知性中心の信仰に立つものとして否定的に捉えている（注10））。内村のみならず、信仰の根拠（神）を「理性の必然性」によって証明していくという発想は、日本にはなじみの薄いものであったといえる。聖アンセルムスと同時代人であり、日本に於ける代表的思想家の一人であつた浄土真宗（仏教）の開祖親鸞（1173－1262）の宗教思想の中には、聖アンセルムスがなした「信仰の対象を理性によって推論し証明していく」、という考え方（方法論）はみられない。江戸時代（1600－1868）の代表的思想家・国学者本居宣長（1730－1801）の論述の中にも、「理性の必然性（rationes necessariae）」によって「信仰の対象」の存在と根拠を論証しようとする所はみられない（注11）。つまり、日本人の思想・思惟の方法と、キリスト教思想家聖アンセルムスにみられる「理性の必然性」によって「信仰」対象を「知解」しようとする方法論とは、その認識を異にさせていたということなのである。

明治維新後、日本人ははじめて具体的に西洋文明の精神——とりわけ民主主義思想とキリスト教（プロテスタント）精神に触れ、それらの内容の「日本的なもの」との相違を知るに至った。しかし、「日本的なもの」との相違を知るためにには、さらに西洋文明の精神

注 10 内村鑑三「キリスト教問答」（講談社 1984）184頁。「神は、アンセルム、アクイナスの半ギリシャ的神学を退けて、イエスに単純なる罪のゆるしの福音を唱えしめ給ふたしと述べている。

注 11 親鸞の論証が「理性の必然性」により論証されるものではなく、「自然法爾」一即ち「おのづから」成る「融合」を目指すものであることを、石田は語っている（石田「親鸞」前掲書、95、237頁）。

本居の「知解」の方法について、次のように言及されている。「知る対象である『事の心』と、知る主体である『人の心』とが共鳴しあって、一つに融合すること」を、本居は指向していた（田原嗣郎「本居宣長」＜講談社 1968＞79頁）。以下の書にも同様の指摘がある（相良享「日本の思想」＜ペリカン社 1989＞200－203頁。菅野覚郎「本居宣長一言葉と雅び」＜ペリカン社 1991＞348－9頁）。

の内容を形成させる発想法・方法論との相違を知ることが不可欠の条件とされる。明治の文明開化思想の洗礼を受けた内村は、キリスト教に接しそれを受容するにとどまることなく、さらに渡米（留学）して本場のキリスト教社会をつぶさに観察し、西洋文明の発想そのものに触れようとしたのである。しかし、内村の滞米生活はあにはからんや大きな失望を彼に与えさせた。キリスト教社会であるはずのアメリカに、多くの不正や問題点があることを知らされたからである。しかし、その故をもって彼のキリスト教探求（真理の探求）は打ち切られはしなかつた。アメリカのキリスト教ではなく、キリスト教そのものを探求していく彼の歩みは、ここから始められたのである。その歩みは、キリスト教信仰の内容を、アメリカ的発想・方法をもってではなく、日本の発想・方法をもって探求することへと、道を開かせるに至らせたのである。

内村は、信仰を内面的に深化させると共に、「日本的なもの」を受け皿として、彼にとってのキリスト教信仰の再構築を試み始めた。「信仰知解（Intellectus Fidei）」の道への始まりである。

三、聖アンセルムスと内村鑑三に於ける「信仰の知解」

3.1 内村鑑三に於ける「信仰の知解」

内村の「信仰の知解」を示す範例は、その著作『キリスト教問答』及び『求安録』の中に示されている。

内村は、何故自分がキリスト者になつたかについて、「信仰の知解」に即してこう語っている。

「私のキリストに対する信仰は私が推理的搜索によって得たものではないということです（注12）」……（一）

注 12 内村鑑三「キリスト教問答」前掲書、71頁。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

「もしキリストの神性が推理的搜索によって発見することのできるものでありますならば、それはわずかに吾人の理性を満足させるに足るだけの真理でありまして、吾人の全性を感化するに足る真理ではありません（注13）」……（二）

「神の真理は背理的ではありませんが、しかし超推理的であります。理性以上の機能によって知ることのできる真理でなければ、これを神に関する真理ということはできません（注14）」……（三）

（では何によって私はキリストの神性（神存在）を認めたのかというと）

「私の全有 whole being によってです。即ち私の実在そのものに省みて、ついに彼を私の救い主、すなわち神と認めざるを得ざるに至ったのであります（注15）」……（四）。

（それは具体的にどういうことかというと）

「私は罪人であるということを発見したからであります。私が生まれながらの罪人であることがわかった時に、私は私の理性までを信じなくなりました。生まれつきのままの心をもってしてはとうてい神を見ることはできません。神のことをわかるうと思えば、まったく自己を捨てて神の光明を仰がなければなりません（注16）」……（五）。

「自己の罪を恥じ、良心の平安を宇宙に求めて得ず、煩悶の極きわみ、援助たすけを天にむかって求めました時に、十字架上のキリストが心の眼に映り、その結果として、罪の重荷が全く私の心より取り去られました。その時に私は初めて自分らしき者となりました。それから後というものは、私の全体に調和がきたりまして、私はその時初めて神の救済とはどんなものであるかがわかりました（注17）」……（六）。

注 13 同

注 14 同

注 15 同

注 16 同

注 17 同書、73頁。

『キリスト教問答』の著作を介して、内村は以上のように「信仰を知解」する論を進めた。キリスト教信仰の中心は「救濟」であり、その証明は推理によって進められるものではなく、「実際的真理（Practical Reason）」である自己の実在を通しての体験によることを叙述したのである。「実際的真理（Practical Reason）」が「論理的真理（Theoretical Reason）」に勝ったのである（注18）。

しかし、かかる内村の論述は、「推理の必然性（rationes necessariae）」を内容的に否定しつつも、その論述の展開は極めて論理的に整理され、「推理の必然性」に即して語られている。内村の「信仰の知解」が非論理的になされたものでなく、合理的推論の思考過程をふまえてなされたものであることは、その論述の展開の仕方から明らかである。

3.2 内村鑑三に於ける「信仰の知解」・その言語学的考察

さらに内村は『求安録』の中の「信仰の知解」と題する一章で、「信仰の知解」は論理的（知識）真理追求の方法によらずして実際的（道徳）真理追求の方法によると述べつつも、「信仰の知解」における言語学的考察の所では、「推理の必然性」によって論理を開させてているのである。

「宗教上の信仰を、信ずべからざる事を信ずることと見なすものは、いまだ信仰の何たるかを知らざる人なり。これ信仰の真正の意義にあらざることは、聖書と言語学との充分に証明するところなり。ヘブライ語のヘエミン（He'emin）即ち「信ずる」なる語は（創世記十五章六節拠出）、アーマン（aman）すなわち「ささゆる」「より頼む」の意なり。オーメン（'omen）すなわち「真実」（英語の verity）なる語もまた同根詞より來たる。新約聖書のアーメン（amen）すなわち「實にしかあれ」なる語もアーマンの変語にして、アーメンの神（イザヤ書六十五章十六節拠出）は真実の神と訳す（注19）」… …（二）。

注 18 同書、77 頁。

注 19 松沢弘陽編「日本の名著36・内村鑑三」（中央公論社 1985）283 頁。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

「ギリシャ語のピステオー (Pisteuo) 「信ずる」なる動詞（創世記十五章六節、ロマ書四章三節拠出）並びにピステス (Pistis) 「信」なる名詞は、前述のヘブライ語の訳字として用いらるるものなり。共にペイソー (Peitho) 「縛る」^{しば}または「結ぶ」なる語の変語にして、広大なる意義を有するに至れり（英語の bind 「つなぐ」「約束する」と対照せよ）。しかして新約聖書の記者は、その各種の意義によりてこれを使用したれば、原文のピステオー並びにピステイスなる語を解するがためには、文の前後関係（コンテキスト）によらざるべからず（注20）」……（三）。

「この語（ピステス Pistis）の単純なる意味は信任なり。ルカ伝十六章十一節の「誰か真の財をなんじらに託けんや」は、「任せんや」の意なり。「信任」は、任せらるる者の「正直（せいちよく）」なるを要す。ゆえに「ピステイス」また真率^{しんそつ}の意を含む。ガラテヤ書五章二十二節においてはこれを「忠信」と訳す。マタイ伝二十三章二十三節の「義と仁と信」とは「真実（まこと）」を言うなり。あるいは「確信の義」あり、すなわち、ヘブル書十一章一節におけるがごとし。また「確証」の意あり（使徒行伝十七章三十一節拠出）（注21）」……（四）

「シナ語の『信』は、我国で『マコト』と訓（くん）す。すなわち『誠実』を言うなり。「忠信」といい、「信頼」といい、一として「真実」の意を含まざるはなし。ヘブライ語のアーメン、ギリシャ語のピステス、英語のビリーブ、皆同一の意を含有す。言語はいまだその単純と真率とを失わざる前に発達せしものにして、その真情を発表せしものなり。……故に信仰の基礎は「真実」なり、「真実」なくして信仰あるなし、信仰の反対は詐偽なり（注22）」……（五）。

かかる「信仰知解」をめぐる言語分析に於いて、内村が「信じること」の訳に「正直

注 20 同書、283頁。

注 21 同書、284頁。

注 22 同

(せいちよく)」及び「忠信」「真実(まこと)」の訳をあてていることに注意したい。「正直」とは、聖アンセルムスの思索の中心概念となった *rectitudo* の訳にあてられたものもある。「正直」は、「清く直く純粹な心」といいかえることができる(注23)。

「正直」に次いで「信じること」の訳にあてられている「忠信」「まこと」の用語は、極めて日本的な概念用語である。「忠信」は、江戸時代における朱子儒学の鍵概念をなしたもので、この「忠信」の儒学は中国の朱子儒学と異なる日本独自のものとして知られている(江戸期儒学研究の碩学相良享氏の研究・参照(注24))。「まこと」は、「真実」とも「誠」とも読まれ、「真心(まごころ)」と対をなしている。そしてこれらは、いづれも日本人の伝統的考え方の鍵概念をなす用語として、用いられてきたものであった。内村の「信仰知解」をめぐる思索は、かかる日本人の伝統的考え方を踏まえ、その延長線上に構築されたものである。

3.3 聖アンセルムスに於ける「信仰知解」—『プロスロギオン』 2—4章の論証

では次に、聖アンセルムスに於ける「信仰知解」の具体的範例と言語表現を、著作『プロスロギオン』を通して探つてみることにしよう。

「プロスロギオン」は、2.1で既述したように聖アンセルムスが「本体論的神存在の証明」を論証した著作であり、聖書の権威に基づく信仰による推論を排し「理性の必然性」だけに基づく推論によって論証を試みた著作として知られている。同著作は聖アンセルムスの著作の中で注目されるにとどまらず、哲学思想史上「神存在の証明」を「理性による必然性」に基づいて思索した著作として、彼以後の哲学者たち——聖トマス、デカルト

注 23 「正直」について、日本倫理思想研究の碩学相良享氏の研究に詳しい(相良享「日本人の心」(東京大学出版会 1984) 73-81頁。相良享「日本の思想」(ペリカン社 1989) 172-177頁)。拙論——坂本陽明「正しさの言語と思想概念」(光啓出版 1991)。

注 24 相良享「誠実と日本人」(ペリカン社 1980) 47-58, 125-177頁。アメリカの社会学者ベラーも「忠信」の研究を行っている(R.N.Bellah, Tokugawa Religion, Glencoe III, Harvard Univ. 1957.)。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける 信仰と理解—その言語学的研究

(1596–1650)、スピノザ (1632–1677)、カント (1742–1804) 等に多大な影響を与え、「神存在の証明」の原型をなさしめるに至らせた（注25）。ところで、キリスト教哲学思想の流れには、「理性の必然性」によって「信仰の知解」を論証しようとする聖アンセルムス的主知主義の流れと共に、意志の働きに重点を置いて「信仰の知解」を把握しようとする聖アウグスティヌス的主意主義の流れもある。内村は、この主意主義の流れの影響を受けている。しかし、主知主義・主意主義の別があつても、信仰の働きを「認識 (cognitio)」として把え、信仰の働きの中に「理性の働き」と「意志の働き」を包括させ、「信仰の知解」をあくまで認識的範疇に於て把えようとする所に於いて、両者（聖アンセルムス的流れと聖アウグスティヌス的流れ）は共通の基盤に立っている。

聖アンセルムスは、信仰の働きの中にある「理性 (intellectum, ratio) の働き」と「意志 (voluntas) (主体の決断) の働き」を、共に神によってもたらされた「恩寵 (gratia) の賜物 (donum)」としつつ、その働き (機能) の別を明確に峻別させた。『プロスロギオン』2–4章の「神の存在証明」の論証は、その範例である。彼は、この論証を「理性の必然性」によって行った。

聖アンセルムスの論証過程——『プロスロギオン』2–4章

A. 命題の提示

「神は、それより偉大なものが何も考えられ得ない何かである (Aliquid quo nihil

注 25 最新の聖アンセルムス国際学会に於いても、(1985. Villanova, 1987. Helsinki, 1990. Paris)かかるテーマは中心課題として提示されている (R. Campbell, Freedom as keeping the truth, in: Anselm Studies An Occasional Journal II, New York 1988.

J. Vuillemin, Les Preuves cartesiennes et la preuve du Proslogion, in: Anselm studies II. Hircko Yamazaki, Theological Method in St. Anselm's Theory of Freedom, in: knowledge and the sciences in medieval Philosophy, Helsinki 1990.

H. Kohlenberger, Schopfungstheologie im Proslogion, in: St. Anselme, Penseur d'hier et D'aujourd'hui, Paris 1990. A. Galonnier, Auto-suffisance et auto-probance dans l'argument du Proslogion, in: St. Anselme, Paris 1990. 『プロスロギオン』を扱った代表的研究書として次の書がある (C. Hartshorne, Anselm's discovery: A Re-Examination of the Ontological Proof for God's existence, USA, 1965.

maius cogitari potest)」

B. 論証の過程

論証①、私から「神はそれより偉大なものが何も考えられ得ない何か」ということを聞く者は、その聞いた内容（語られたことそれ自体）を理解（知解）する。

②、そして、理解（知解）したことは、たとえそれが存在することを理解（知解）したのではないにしても、聞いた者の知解のうちにある。

③、画家がその描こうとしていることを予め考える時、彼はそれを知解のうちに持つてはいるが、まだ描いていないものが存在することは理解（知解）していない。

④、しかし、描きあげた時、彼はそれを理解のうちに持ち、またすでに描いたものが存在することも理解（知解）している。

⑤、従って、「それより偉大なものが何も考えられ得ない何か」ということを聞く時、彼（聞く者）は理解（知解）し、理解（知解）したものは何でも理解のうちにあるから、それが少なくとも理解のうちにあることを、彼は納得している。

⑥、しかし、「それより偉大なものが何も考えられ得ないもの」が、理解のうちにのみあることはあり得ない。何故なら、もし少なくとも理解のうちにだけでもあるなら、それが実在として存在することは考えられ得るし、またそのほうがより偉大である。

⑦、もし、「それより偉大なものが考えられ得ないもの」が、理解のうちにのみあるとなると、「それより偉大なものが考えられ得ないもの」自身が、「それより偉大なものが考えられ得るもの」になる。

⑧、しかし、たしかに、それはこのようなものではありえない。

⑨、それゆえ、疑いもなく、「それより偉大なものが考えられ得ない何か」は、理解のうちにもまた実存としても存在する。

⑩、しかも、それは存在しないと考えられ得ないほど実にまことに存在する。

⑪、そもそも、存在しないと考えられ得ない何かが存在することは考えられ得る。

聖アンセルムス（St. Anselmus）と内村鑑三に於ける 信仰と理解——その言語学的研究

それは存在しないと考えられ得るものよりも偉大である。

⑫、そこで、もし、「それより偉大なものが考えられ得ないもの」が存在しないと
考えられ得るならば、「それより偉大なものが考えられ得ないもの」自身が、「それ
より偉大なものが考えられ得ないもの」ではなくなる。これは矛盾である。

⑬（結論）、それゆえ、「それより偉大なものが考えられ得ない何か」は、それが
存在しないことが考えられ得ないほどにまことに存在する。

そして、これこそ、主、私たちの神よ、あなたです。

聖アンセルムスは、「信じる」「信仰」という言葉を括弧に入れ、「理性の必然性」だけ
によって「信仰の知解」を論証した。ここには、内村との相違が証示されている。内村
は、「信じる」「信仰」という言葉に「信仰の知解」の論証帰結を収斂させ、神存在を認
め得たことを自身の全有（ens, existentia）に帰着させている。

3.4 聖アンセルムスに於ける「信仰の知解」の言語構造の 表示（significatio）

かかる、聖アンセルムスの「信仰」（fides）を括弧に入れる論証の裏付けは、「信仰」
「知解」「理性」などの用語が、『プロスロギオン』の文構造の中でどのように用いられ
ているかとという言語構造分析によつても証示される。例えば、『プロスロギオン』二章
の論証の部分に於いて、「理解」もしくは「知解」と訳される語は頻繁に使用（名詞形は
十回、動詞形は八回使用）されているのに、「信仰」に該当する語はこの箇所では皆無で
ある。これは、聖アンセルムスが、「理性の必然性」による論証の領域（場）と、信仰告
白の領域（場）とを明確に区別していたからである。

以下、『プロスロギオン』文中の「知解」と「信仰」を表示する語の用法例を日本語・
英語・ラテン語の順で比較対照させ、その構造の分析をおこない、「信仰の知解」をめぐ
る聖アンセルムスと内村との発想の差異を明らかにしたい。

＜資料の説明＞

1. 資料①は、ラテン語原文と英文及び日本語訳を対照させたオリジナル・テキストである。
2. 資料②は、資料①に基づいて、用語別に編纂・整理したものである。内村鑑三『求安録』の「信仰の知解」の章との比較対照も試みられている。この比較対照から、聖アンセルムスと内村の「信仰理解」の方法的差異を識ることができる。
3. 資料③は、資料①②を踏まえて、内村に於ける「知解」と「信仰」の用法例を編纂・整理し、参考に供したものである。
4. オリジナル・テキストは次のものを使用した。

①ラテン文 St.Anselmi Opera Omnia, Ad Fidem Codicum Recensuit F.S. Schmitt,
Stuttgart 1968.

②英文 St. Anselm Basic writings: Proslogion, translated by S.N. Deane, Illinois
1966.

③日本文

古田暁訳『アンセルムス全集』(1980、聖文舎)。長沢信寿『プロスロギオン』(1942、岩波書店)（ラテン語動詞 *intelligo* の訳を、長沢氏は「知解する」と訳し、古田氏は「理解する」と訳している。名詞 *intellectus* の訳を、長沢氏は「知性」に統一し、古田氏は「理解」と「知性」を併用させている）。

資料1 聖アンセルムス『プロスロギオン』に於ける「信仰」と「知解」の言語構造比較（原文）

章 序言	日本語	英語	語 言	(ラテン語)
	1. (私は) 信仰の根拠について瞑想する	of meditation on the grounds of faith		meditandi de ratione fidei cogentibus
	2. (私は) 神の実体について信じる凡ての事を	whatever we believe regarding the divine Being		quaecumque de divina credimus substantia
	3. (私は) 自分が信ずるものと知解しようと求めらる者として	seeks to understand what he believes		quaerentis intelligere quod credit
4.	(それは) 「信仰の根拠に関する黙想の典範」と言はれ	An example of Meditation on the Grounds of Faith		Exemplum meditandi de ratione fidei
5.	(それは) 「知性を求める信仰」と言はれ	Faith Seeking Understanding		Fides quaerens intellectum
1章	1. (私は) あなたの高さと私の知性を比べようとするのではない	for in no wise do I compare my understanding with that		quia nullatenus comparo illi intellectum meum
	2. (私は) 私の心が信じまだ愛しているあなたの真理を知解したい	but I long to understand in some degree the truth, which my heart believes and loves		sed desidero aliquatenus intelligere veritatem tuam, quam credit et amat cor meum
	3. (私は) 信ずる為に知解しようと求めるのでなく知解せんが為に信ずる	I do not seek to understand that I may believe, but I believe in order to understand		Neque enim quaero intelligere ut credem, sed credo ut intelligam
	4. (私が) もし信じなければ、知解することも得ない。このことを私は信じている	Also I believe, that unless I believed, I should not understand		Nam et hoc credo quia nisi credidero, non intelligam
2章	1. 信仰に知性を与へ給ふ主よ	Lord, who dost give understanding to faith that thou		Ergo, Domine, qui das fidei intellectum et hoc es quod credimus

2. 私たちの信ずる如くあなたは存在する	art that which we believe
3. (あなたは)私たちの信ずるが如きものであることを私が知解することができるように計らい給え	give me, so far as thou knowest it to be profitable, to understand that thou art as we believe
4. (私たちは)～(あなた)を信じている we believe that～	ut quantum scis expedire intelligam, quia es sicut credimus
5. (私は)彼が聞くものを知解する	Et quidem credimus～
6. 知解したことば、存在することを知解したのではないにしても、彼の知性のうちにある	I understands what he hears what he understands is in his understanding, although he does not understand it
7. ものが知性のうちにあることと、ものが存在していることを知解することとは同じではない	quod intelligit in intellectu eius est, etiam si non intelligat illud esse.
8. 画家は、描くものを知性のうちに持つている	Aliud enim est rem esse in intellectu, alud intelligere rem esse
9. 画家は、存在することはまだ知解していない	pictor habet quidem in intellectu but he does not yet understand it to be
10. 彼はそれを知性のうちに持つ	sed nondum intelligit esse quod nondum fecit
11. 彼は存在することをも知つている	he has it in his understanding habet in intellectu
12. 愚か者は知解する	he understands that it exists intelligit esse quod iam fecit
13. 知解したもののは何でも知性のうちにある	the fool understands it. quia hoc cum audit intelligit quidquid intelligitur, in intellectu est understanding
14. 彼はそれが知性のうちにあることを納得している	he convinced that it exists in the understanding convincitur ergo etiam insipiens esse vel in intellectu aliquid～
15. 或るもののが知性のうちにのみあるこ	non potest esse in solo intellectu

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

	とはありえない	alone	
16.	もし、それが知性のうちにだけあるなら	it exists in the understanding alone	si enim vel in solo intellectu est
17.	もし、或るものか知性のうちにのみあるなら	/	est in solo intellectu
18.	或るものは、知性のうちに存在する	it exists in the understanding	Existit ergo procul dubio aliquid~, et in intellectu
3章	1.あなたが存在することは、理性的精神にとつて判然としている	it is so evident, to a rational mind, that you dost exist	cum tam in promptu sit rationali menti Te maxime~
4章	1.～が知解せられる時は	which the object is, is understood	aliter cum id ipsum quod res est intelligitur
	2.神が何であるかを知解している者は～である	one who understands what God is	quippe intelligens id quod Deus est
	3.これをよく知解している者は、～をも知解する	he who thoroughly understands this, assuredly understand that	Quod qui bene intelligit, utique intelligit id ipsum sic esse
	4.神を知解する者は～である	he who understands that God～	Qui ergo intelligit sic Deum esse
	5.あなたの恩寵により信じていたことを、あなたの光によつて知解し	what I formerly believed by the bounty, I now so understand by thine illumination	quia quod prius credidi te domante, iam sic intelligo Te illuminante
	6.私があなたの存在することを信じることを望まなくとも、あなたが存在することを知解しないことは私には不可能である	If I were unwilling to believe that thou dost exist, I should not be able not to understand this to be true	ut si Te esse nolim credere, non possim non intelligere
9章	1.あなたの慈恵は測り難い（理解を越えている）	since thy goodness is incomprehensible	quia bonitas tua est incomprehensibilis
	2.～を（私は）わかるが（理解出来る	although it appears why～	et cum forsitan videatur

が)	3. どうしてそなのか、その理由は～である	thy goodness is hidden the reason	qua ratione hoc es
	4. それは義の理由の要求する所である	the concept of justice seems to demand	ratio tamen iustitiae hoc postulare videtur
	5. 至高の善が望んだことを私はわかるが	it is known that～	scitur quia summe bonus hoc facere voluit
	6. 一切の知性を超せる憐みよ	O boundless goodness, which dost so exceed all understanding	O immensa bonitas quae sic omnem intellectum excedis
	7. 何故～なのかを知解することは難かしい	it is hard to understand how～	Nam esti difficile sit intelligere
	8. (私たちは) ～を信じなければならぬ	we must believe that～	necessarium tamen est credere
	9. 私が、私が語ることを、知解するよう助けて下さい	help me to understand what I say	adiuva me, ut intelligam quod dico
	10. あなたがそれ以上の善であるとは知解できぬほど(あなたは) 善であり給う	thou shouldest be so good that thou canst not be conceived better	An quia justum est Te sic esse bonum, ut nequeas intelligi melior～
	11. あなたが悪人を憐れむことは正義に適うと信じなければならない	it is right to believe that～	fas est credere Te juste misereri malis
11章	1. (私は) ～をいくらかは理解できる	it can be comprehended in any way	si utcumque capi potest
	2. (私は) ～を、どのような理由をもつてしても理解できない	by no consideration can we comprehend why～	
13章	あなたについてのみ知解される	this is understood to be true of alone	quod de Te solo intelligitur
14章	1. あなたがいかにして神であると解す	which thou hast conceived him to be	quomodo est～ intellexisti

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

	ことができるか	
2. (魂は) どうして知解したのである うか	how did it understand this	aut potuit omnino aliiquid intelligere
3. (魂は) 知解することができるので あるうか	could it understand anything	
4. 魂は～を悟る(知る)	it sees that～	sed videt se non plus posse videre
5. 理性的(合理的)精神を照らす光は、 偉大である	rational mind～	quod rationali menti lucet
6. それは被造物が知解し得るよりも以 上のものである	assuredly more than a creature can conceive	certe plus quam a creatura valeat intelligi
16章 1.私の知性はこの光に達し得ません	My understanding can not reach that light	non potest intellectus meus ad illam
2.私の知性はその光を把握しません	It does not comprehend it	non capit illam
18章 1. (私を) 全知性をもつて、あなたへ 向かわせ給え	with all its understanding let it strive toward thee	et toto intellectu iterum intendat in Te Domine
2.私の心はあなたを何と知解したらよ いのか	what shall my heart conceive thee to be	quid Te intelliget cor meum
3.私の限られた知性で(あなたを)見 ることは出来ない	my straitened understanding can not see	non potest angustus intellectus meus tot uno simul intuitu videre
4.それらは知性によって分割可能であ る	in concept is capable of see	et vel actu vel intellectu dissolvi potest
5.あなたは知性によつて分割不可能で ある	dissolution indivisible by any conception	nullo intellectu divisibilis
24章 1. (私の魂よ) その全知性を喚起せよ	arouse all thy understanding	anima mea, et erige totum intellec- tum tuum

資料2 『プロスロギオン』の用語分析

1. 動詞「信じる」の用いられ方

章	番号	S(主語)	O(目的語)	V(述語)	(英語訳)	(ラテン語原文)
序	2	私は	神の実体について	信じる	believe	credere
"	3	"	自分が信じるもの	知解する	"	"
1	2	私の心が	あなたの真理を	信じている	"	"
"	3	私は	信じるために	知解するのでない	"	"
"	3	私は	知解せんがために	信じる	"	"
"	4	私が	信じなければ	知解し得ない	"	"
"	4	私は	このことを	信じる	"	"
2	2	私たちは	あなたを	信する	"	"
"	3	あなたは	私たちの信する方	です	"	"
"	4	私たちは	あなたを	信じる	"	"
4	5	私は	あなたの恩寵により	信じる	"	"
"	6	私は	あなたの存在を	信じる	"	"
9	8	私たちは	~を	信じる	"	"
"	11	私たちは	正義に適うと	信じる	"	"

2 名詞「信仰」の用いられ方

章	番号	S(主語)	O(目的語)	V(述語)	(英語訳)	(ラテン語原文)
序	1	私は	信仰の根拠について	瞑想する	faith	fides
"	4	それは	信仰の根拠に関するものと	言はれる	"	"
"	5	"	知性を求める信仰と	言はれる	"	"
2	1	主は	信仰に知性を	与へ給ふ	"	"

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解—その言語学的研究

3 動詞「知解する」の用いられ方

章	番号	S	O	V	(古田氏の訳)	(英語訳)	(ラテン語原文)
序	3	私は	自分が信じるもの	知解しようとする	理解する	understand	intelligere
1	2	私は	あなたの真理を	知解したい	"	"	"
"	3	"	信ずるために	知解しようとしない	"	"	"
"	3	"	知解せんがために	信じる	"	"	intelligam
"	4	私が	信じなければ	知解することも得ない	"	"	"
2	3	"	あなたは信すべき方であることを	知解する	"	"	"
"	5	私は	彼が聞くものを	知解する	"	"	intelligit
"	6	彼が	聞いたことを	知解したことは	"	"	"
"	6	彼が	存在することを	知解したのではない	理解しない	"	intelligat
"	7	彼が	存在することを	知解する	理解する	"	intelligere
"	9	画家は	存在することを	知解していない	理解しない	"	intelligit
"	11	彼は	存在することを	知っている	理解する	"	"
"	12	愚か者は	何か或るもの	知解する	"	"	"
"	13	知解したものは	知性の内に	ある	"	understood	intelligitur
4	1	そのもの自体が		知解させられる	"	understood	intelligitur
"	2	彼は	神を	知解する	"	understand	intelligens
"	3	彼は	このことを	"	"	"	intelligit
"	3	彼は	このことをも	"	"	"	"
"	4	彼は	神の存在を	"	"	"	"
"	5	私は	信じていたことを	"	"	"	intelligo
"	6	私は	あなたを	知解しない	理解しない	"	intelligere
9	1	あなたの慈惠は		測り難い	理解を越えている	incomprehensible	incomprehensibilis
"	2	私は	この事を	わかる	理解できる	appear	videatur
"	5	"	この事は	知られる	わかる	known	scitur
"	7	"	何故かを	知解する	理解	understand	intelligere
"	9	私が	語ることを	"	理解する	"	intelligam
"	10	"	あなたを	知解できぬ	"	conceive	intelligi
11	1	私は	望み得るかを	理解できる	理解できる	comprehend	capi
"	2	"	罰するかを	理解できない	理解できない	"	
13	1	それは	あなたについてのみ	知解される	理解される	understood	intelligitur
14	1	私は	あなたを	解する	理解する	conceive	intellexisti
"	2	魂は	どうしてそのことを	知解した	"	understand	
"	3	"	どのようなことも	知解する	"	"	intelligere
"	4	"	出来ないことを	知る	悟る	seem	videt
"	6	被造物は	領域を	知解する	理解する	conceive	intelligi
18	2	私の心は	あなたを	知解する	"	"	intelliget

4 名詞「知性」の用いられ方

章	番号	S	O	V	(古田訳)	英 訳	ラテン語原文
序	5	それは	知性を求める信仰と	言われる	理解	understanding	intellectum
1	1	私は	あなたの高さと私の知性を	比べようとしない	"	"	"
2	1	主は	信仰に知性を	与へ給ふ	"	"	"
"	6	それは	知性のうちに	ある	"	"	intellectu
"	7	ものが	"	"	"	"	"
"	8	画家は	"	持っている	"	"	"
"	10	彼は	"	"	"	"	"
"	13	知解したものは	"	ある	"	"	"
"	14	それは	"	"	"	"	"
"	15	或るもののは	"	"	"	"	"
"	16	それは	"	"	"	"	"
"	17	或るもののは	"	"	"	"	"
"	18	"	"	"	"	"	"
9	6	隣れみは	一切の知性を	超越する	"	"	intellectum
16	1	私の知性は	この光に	達せない	知性	"	intellectus
"	2	私の知性は	その光を	把握しない	"	"	"
18	1	あなたは	私の全知性をもって	向かわせる	"	"	intellectu
"	3	私は	私の限られた知性で	見る	"	"	intellectus
"	4	それらは	知性によって	分割可能である	"	concept	intellectu
"	5	あなたは	"	分割不可能である	"	"	"
24	1	私の魂は	全知性を	喚起する	"	understanding	intellectum

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

資料3 内村鑑三における用語の用いられ方

1 動詞「信じる」の用いられ方

(1) 信仰とは何であるか		
S (主 語)	O (目的語)	V (動 詞)
信仰とは	信すべきからざる事を	信するにあらざるなり
私は	2プラス2を5と	信するあたわざるなり
"	虚言を	"
"	それを	信すべきからざるなり
"	人を虚喝することを	信ぜざるなり
信仰とは	信すべき事を 信することを	言うなり
信仰とは	了得し得ざる事を信するに	あらざるなり
(人は)	五書をモーセの作と	信せるや信ぜざるや
ヨハネ伝は	ヨハネの作ならずと	信ずらば
(人は)	彼の信するごとく	思う
信すべき事を信せざる	いざこに	ありや
世は	信すべき事を	信ぜず
"	信すべきからざる事を	信する
信するものは	いくばくか	ある
(人は)	これを信するに	大差別あり
幾人か	これを	信じ
キリスト信者は	神の存在を	信する
"	この大真理を	"
ギリシャ人が	事を	信じて
ユダヤ人も	十戒を	信じ
彼らが	道理を	信する
(人は)	信すべきからざる事を信する事と	みなす
(2) 信仰の言語学的研究		
S (主 語)	O (目的語)	V (動 詞)
信する語は	ささゆるの意味	なり
アブラハムが		信じて
ギリシャ語の「信する」は	訳字として	用いられる

記者は 英語 Believe とドイツ語 Glauben は	ピステオー（信じる）を 「許す」より	解する 来る
三語は 「信ずる」は	Believe と根源を	共にする 許すなり

(ふ) 信仰とは何であるか

S (主 語)	O (目的語)	V (動 詞)
実ならざる人は		信ぜざるなり
我は	原理を	信じ
我は	忠信なる神を	信す
我の		信ずるところなり
(我は)	誠実の神を	信ずる
我は	神を	信ぜざりしか
汝は	〃	信ぜざりし
我は	神の義と正を	信ぜり
(我は)	信ずるあたわざる	なり
(〃)	ありと	信じ
(〃)	信ぜんと	欲す
わが情性は	信ずるを	許さず
我	信ぜんと	欲す
〃	信ずる	あたわず

2 名詞「信仰」の用いられ方

(1) 信仰とは何であるか		
(主語)	(目的語)	(動詞)
信仰とは	信すべからざる事を信ずるに	あらざるなり
〃	信すべき事を信ずる事を	言うなり
〃	了得し得ざる事を信ずるに	あらざるなり
信仰は	心靈上の	應諾なり
〃	知識的でなく	道徳的である
哲学上の思惟は	信仰のいかんを	示す
科学上の思惟は	信仰の反射像に	あらざるなり
(我らは)	人の信仰いかんを	察する

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

幾人か 信を 宗教上の信仰を (彼は) これは	この信仰によりて 世に 信仰の何たるかを 信仰の意義に	行動するか 見んや もって 知らぬ あらざる
-------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------

(2) 信仰の語言研究

(主語)	(目的語)	(動詞)
「信」なる名詞は この語の意味は 信任は 記者は 信任は ガラテヤ書は 義と仁と信は シナ語の信は 実ヲモッテ (ヒトハ) 忠信と信任は ギリシャ語のピステス・ 英語のビリーフは 信なることばの原因は	訳字として 任せられる者の正直を ピステス(信仰)を ピステス(信)の意を これを「忠信」と 真実を マコトと 信ト 馬ニ信(マカ)セテ 真実の意を みな同一の意を みな	用いられる 信任なり 要す 解する 含む 訳す 言う 訓す イウ 行ク 含む 含有す 相似たり

(3) 信仰とは何であるか

(主語)	(目的語)	(動詞)
信仰の基礎は 信仰は 信仰の反対は 信仰なる語に 信仰は 信仰せらるるものも 信仰するものも 我は 汝の信仰は " (私は) この世界は (それらは)	真実なくして 詐偽 意味を 実 実ならざる 忠信なる神を 全から 救う信仰に 他を 信任の性が (我の) 信仰を	真実なり なし なり 附す なり べからず 信ず ざりき あらざる 信任する ない もつて

3 動詞「知る」（知解する）の用いられ方

(主語)		(目的語)	(動詞)
(1)	汝は	罪惡の世を	知らざるか
	鹿は	鹿なりと	知る
	二と二は	四なりと	知る
	ギリシャ人が	真理と	知り
	彼らは	真理を	知る
	見なす者は	信仰の何かを	知らざる
(2)	新約聖書の記者は	原文のピステイスを	解する
(3)	我は	二直角を	知る
	“	最良の政略を	“
	我は	真正物なるを	知る
	“	実現にあるを	“
	汝は	神を	知れ
	我は	神の愛を	知れり
	“	神の全愛を	知らざりき
	“	これを	知る

3.5 聖アンセルムスと内村鑑三に於ける「信仰の知解」・ その言語構造の分析

3.5.1 『プロスロギオン』の言語構造分析

以上の言語構造の表示 (significatio) から知られることを、以下列挙してみたい。

(1) 言語表現が「理性の必然性」によって導かれていること

聖アンセルムスの言語表現には、概念を自明のもの (per se) とせず、「理性の必然性 (rationes necessariae)」^{えんねんしき}から演繹していく所があり、「プロスロギオン」でも、

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

この方法は援用されている。それは、S (主語) • V (動詞) • O (目的語) の別を明確にするという型をとって、具体化されている。

<例示>

intelligere veritatem tuam,
quam credit et amat cor meum.

(『私は』、私の心が信じ愛しているあなたの真理
を知解したい)

Nam et hoc credo quia nisi
credidero, non intelligam.

(『私が』もし信じなければ、知解することも得ない。このことを私は信じている)

(2)主語 (Subjectum) が明確であること

他方、内村鑑三の言語表現には、日本語の文法構造にみられる S.V.O の別の不明確さ、及び「主語」の省略が多々見られる。

聖アンセルムスの著作である『プロスロギオン』も、日本語に訳されると、「主語」が訳されずにつまされることも少なくない。前述の「資料」①②の中で、()で表示された所は、原文記載の主語が日本語で訳されていない為、筆者が書き加えたものである。これは、日本語の言語表現の構造が、S (主語) を明確化させないでも表意を伝え得ることがある所から、長沢・古田の両氏が S (主語) を訳す必要を認めなかった所に存する（日本語に翻訳する場合、あまり主語を繰り返し明確にするのは、適訳ではないとみなされる。

(3)人称の別が明確化されていること

聖アンセルムスの言語表現には、人称の別が明確に区分されている。それは、ラテン語をはじめとするヨーロッパ言語と日本語の言語構造の違いが与って力がある。聖アンセルムスの言語表現には、誰が・何を・どう・知解する（或は信仰する）のか、その主体の別が明確化されている。*intelligam*（私が～を知解する）、*intelligit in intellectu*（彼が、或る何かが彼の知性の内にある、と知解する）、というように。（*intelligam* と *intelligit* は、*intelligere* ≪*intelligo*≫の、一人称と三人称を表示したものである。）

(4)一人称の主語が多く用いられていること

そして、この人称の別の中で、「信仰」「知解」する主体は、二人称の「あなた」や三人称の「神」、または複数人称の「われわれ」「彼ら」ではなく、一人称の「私」自身であることが、強調されている。

これは、『プロスロギオン』文中の *Intellectus Fidei* を論じた該当箇所・その各人称の頻度数を、明示することによって知られ得る。次表から明らかのように、「知解する」主体は、圧倒的に「私」と表示されている。聖アンセルムスの *Intellectus Fidei* がいかに「認識論」的に捉えられたものであるかが、このことから知られる。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

資料1 人称別「信じる」「知解する」の使用回数

人称		使用回数
一	私は信じる	8
	私達 "	5
	あなた "	0
	彼 "	0
	(人) "	0
	(事) "	1
二	私は知解する	17
	私達 "	0
	あなた "	0
	彼 "	8
	(人) "	3
	(事物) "	8

(5) 「知解する」の回数が多くみられること

(4)の表（資料1）からも知られるように、『プロスロギオン』文中で、「信じる (credo)」は8回、「知解する (intelligo)」は17回、一人称で用いられている。
さらに、次の表からも、「信仰」に対する「知解」の優位を知ることができる。

資料2 『プロスロギオン』文中の「信じる」「知解する」の使用回数

日本語	使用回数	英語		ラテン語	
信じる（動詞）	14	believe	14	credo	14
信仰（名詞）	4	faith	4	fides	4
知解する（動詞）	36	understand	26	intelligere (intelligo)	29
知性（名詞）	21	understanding	19	intellectus	21
理性（名詞）	5	rational～	3	ratio	4

(6) 「知解する」の用法が厳密になされていること

日本語では、「理性」と「知性」の意味上の判別が整然としない所があるが、ラテン語では「理性」は ratio (英語で reason)、「知性」は intellectus (英語で intellect, understanding) というように、言語上の区分が整然となされている。

さらに聖アンセルムスは、認識の厳密さをはかるため、「知解する」のラテン語を、ケース (case) によって intelligo 以外のものに代替させている（「信仰する」のラテン語は、すべて credo で統一されている）。

資料 3 Intelligere とその代替語

ラテン語	使用回数	英 語	使用回数	長沢訳	古田訳
intelligo	29	understand	25	知解する	理解する
		conceive	4	“	“
video	2	appear	1	わかる	“
		see	1	知る	悟る
scio	1	know	1	“	わかる
capiro	1	comprehend	1	理解できる	理解できる
incomprehen — sibilis	1	imcomprehen — sible	1	測り難い	理解を超える

(7) 「信じる」「知解する」の使われる場が峻別されていること

『プロスロギオン』2章から4章の「神存在の証明」の箇所で、聖アンセルムスは用語「信じる (credo)」の用法（使用）を、「論証」に先立つ「導入」部分と「論証」後の「総括」部分で使用しつつも、「論証」部分では一切使用していない。これは、内村鑑三の「信仰の知解」にみられる用法と著しい差異を示すものである。

内村に於ける「信仰の知解」を表示する『信仰の解』の箇所と聖アンセルムスの『プロスロギオン』2－4章の箇所を対照させた次の表（資料4）から、聖アンセルムスが「論証」過程で一切 credo, fides を使用しなかったこと、内村が「論証」過程で credo と intelligo を併用したことが、証示され得よう。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

資料4 聖アンセルムスと内村の「信仰」「知解」をめぐる用語使用度の比較

		信じる	信仰	知解する	知性
プ	論証前まで				
ロ	(序章)	2	3	1	1
ス	(一章)	5	0	4	1
ロ	(二章)	3	1	1	1
ギ	論証過程				
オ	(二章)	0	0	8	10
ン	(三章)	0	0	0	0
	(四章)	0	0	5	1
	論証後				
	(四章)	2	1	2	0
信仰の解	信仰の知解(1)	28	13	7	0
	信仰の語言研究	8	10	1	0
	信仰の知解(2)	14	11	8	0

聖アンセルムスは、「私は～を知解する (intelligo)」という言語構造でのみ「論証 (Argumentum)」を進めようとし、「私は～を信じる (credo)」という言語構造を「Intellectus Fidei」に介在させることを断った。Intellectus Fidei を、rationes necessariae によってのみ (sola) 進めんとしたところに、聖アンセルムスの「方法論」の特色があつたといふことがいえよう。(同じベネディクト会修道士であり聖アンセルムス研究の第一人者 F・S・シュミットは、聖アンセルムスの学的方法論は Sola Ratione ≪理性のみ≫の方法でなされた、ことを指摘している) (注26)。

注 26 F. S. Schmit, Die Wissenschaftliche Methode in Anselms "Cur deus homo", in: Spicilegium Beccense 1, Paris 1959, 354—359.

次の論文にも言及がある。小野忠信『アンセルムスの神学』(新教出版社 1985) 3—33 頁。

K. Kienzler, Glauben und Denken, Herder 1981, 359—363.

3.5.2 内村の『信仰の解』の言語構造から知られること

(1)動詞「信じる」が動詞「知解する」より多く使われていること。

聖アンセルムスは、「神の存在証明」を進める論証において（『プロスロギオン』2章－4章）一切「信じる（credo）」という動詞を用いず、理性の必然性のみによる「信仰の知解（Intellectus Fidei）」を行った。そして、Intellectus Fidei を論じた『プロスロギオン』全文に於いても、「信じる（credo）」の用法回数を14回にとどめている（「知解する」は36回用いられている）。これに反し、内村の『信仰の解』に於いて、「信じる」は50回用いられ、「知解する」は、16回にとどめられている。

聖アンセルムスが Intellectus Fidei を、「私は～を知解する」というように認識的に論証しようとしたし、内村が「私は～を信じる」というように存在論的（観的）に論証しようとしたことが、このことからも表示されよう。

資料1 聖アンセルムスと内村の Intellectus Fidei の言語頻度数

（『プロスロギオン』と『信仰の解』全文）

	聖アンセルムス	内村鑑三
動詞「信じる」	14	50
名詞「信仰」	4	34
動詞「知解する」	36	16
名詞「知性」	21	0
「信仰を知解する」の表示箇所	8	2

(2) 認識主体が一人称だけに必ずしも置かれていないこと

聖アンセルムスが「信仰の知解」を論じるに際して、「私は～を信じる」「私は～を知解する」というように一人称を多く用いて論じているのに対し、内村は「信じる」「知解する」の主語を三人称にも多く用いて（特に「信じる」に於いて）論じている。

聖アンセルムス (St. Anselmus) と内村鑑三に於ける
信仰と理解——その言語学的研究

これは、「信じ」「知解する」のはあくまで「私」という主体であることを強調する「認識論」的発想と、「信じる」ことそのものを強調する「存在論」的発想（観的発想）との差ということがいえよう。

資料2 聖アンセルムスと内村の *Intellectus Fidei* の言語の人称表示

人 称	聖アンセルムス	内村鑑三
1 私は信じる	8	15
1 私達は信じる	5	0
2 あなたは信じる	0	1
3 彼（人）は信じる	0	23
3 それ（事）は信じる	1	8
3 それら（人）は信じる	0	3
1 私は知解する	17	7
1 私達は知解する	0	0
2 あなたは知解する	0	2
3 彼（人）は知解する	11	5
3 それ（事）は知解する	8	2

(3) 「私達」という人称が使われていないこと

また、聖アンセルムスが「信じる」の主格に「私たち」という一人称の複数を用いているのに対し、内村にあってはそれがゼロであることに注目したい。これは、聖書学者八木誠一の指摘（注27）にもあるように、キリスト教が「共同体」的志向をとっていること、それに反して日本の宗教が「個人」的実存的志向をとっていること、と深い関係がある。キリスト教の母体であるユダヤ教の信仰とは、「我々を導く我々の神を我々が信じる」信仰であり、キリスト教もこれに準じている。同じキリスト教信仰に立ちながら、

注 27 八木誠一『パウロ・親鸞・イエス・禅』（法藏館 1983）27-28頁。

内村にこの意識が欠けているのは、内村の宗教的発想が日本の発想に依拠しているからである。そして、その日本的発想は、超越者（仏とか神）を認識によってではなく個人的実存的「覚」（注28）によって捉えようとする所に、その特徴を持っていた。

注 28 同書 46 頁。

※「覚の宗教」<歎異抄>について

- ① 西洋キリスト教的発想法が、知性に重点をおく認識論であるのに対し、日本の発想法は「直覚的」覚の把握に依拠していると述べたのは、世界的に知られている禅の権威鈴木大拙（1870—1966）であった（鈴木大拙「鈴木大拙の世界」（燈影舎 1989）109—179 頁）。鈴木大拙は日本の靈性の自覺は親鸞によってはじまつたと述べている（鈴木大拙「日本の靈性」（岩波書店 1972）25 頁。鈴木は禅家であるが浄土宗や日本における他宗教（キリスト教も含め）にも深い洞察を示し、日本精神の根源にある日本の靈性とは何かを探求し続けた。鈴木は長くアメリカに滞在し、禅についての著作を多く英文で出版した。英文の言語表現に於ける鈴木の禅の著作と日文のそれを比較対照しながら読むことにより、言語学的側面からの宗教思想・比較研究の為の多くの収穫が得られるよう思う。例えば次の書が勧められる。

Zen in: Encyclopedia Britanica, 1963

Satori in: The Review of Religion, New York, Columbia Univ. Press, 1954,
Vol. XVIII, Nos. 3—4, p. 133—134.

Zen in: Zen Buddhism, selected writings of Dr. T. Suzuki, Doubleday
Anchor Books, New York, 1956.

鈴木の考えを発展させ、キリスト教と仏教の対話を神学的レベルに於いて深化させたのは K・バルトに師事した滝沢克己（1909—1980）と八木誠一（1932—）であった。八木は、キリスト教における「覚」の立場を提示し、仏教との統合（Integration）をはかる試みを試みた（八木誠一「仏教とキリスト教の接点」<法藏館 1980 年版>。八木誠一「パウロ・親鸞・イエス・禅」<法藏館 1983>）。

- ② 「覚」の宗教は、日本の宗教のみならず、キリスト教にもみられる。ドイツ神秘主義やギリシャ正教会の神秘主義の中にみられる。M.Eckhart (1260—1327) は、信仰における認識的側面と直觀（覚）的側面を統合しようとした。そのキー・ワードに abeg escheiden (離脱する) vün-kelin (火の粉) 等を据えた (M. Eckhart, hrsg., eingeleitet und zum Teil übersetzt von D. Mieth, Walter-Verlag 1979.)。

聖アンセルムス（St. Anselmus）と内村鑑三に於ける 信仰と理解——その言語学的研究

3.6 結び——聖アンセルムスと内村鑑三の 「信仰の知解（Intellectus Fidei）」・その総括

以上、聖アンセルムスと内村鑑三に於ける「信仰の知解（Intellectus Fidei）」を、比較言語学的に考察してきた。言語構造の差異が、信仰知解に深い影響を与えるものであることが、本考察から明示され得たようだ。

キリスト教の母体であるユダヤ教に於いては、本来「信仰」や「知解」の用語は、元訳 *he'emin*（信じる）や *yādhā*（知解する）のヘブル語からも知られるように、「存在論」的に用いられていた。（注29）。それがギリシャ・ヘレニズム圏にキリスト教が伝播し、ギリシャ語にキリスト教思想の著作が翻訳されるに伴い、*πιστεύω*（信じる）・*γνῶσκειν*（知解する）等認識論的思考を深めさせる用語が用いられるようになっていったのである（注30）。聖アンセルムスの言語であるラテン語も、この認識論的思考を伴わさせたギリシャ語の発想を継承させている。

本邦の内村鑑三は、かかるギリシャ・ラテン語の発想から導き出されたキリスト教を信じるに至った。^{また}亦内村は、キリスト教の真髓を極める為、キリスト教国アメリカへ渡り、そこでキリスト教の発想（思想）と英語の発想を学び、かかる発想を以って、「信仰の知解（Intellectus Fidei）」の何であるかを明らかにさせようとした。内村の言語表現（言

Trappist 修道士 T.Merton 神父（1915—1968）も、禅とキリスト教との対話を求め、そのキー・ワードに「見性成仏」「般若」「浄化」「深化」を据えさせた（T.Merton, *Mystics and Zen Masters*, New York 1967.）。キリスト教と仏教との対話について、西洋の側から、おそらく初めて、問題の核心に迫って深くそれを探求した書として、次の書かあげられる（Hans Waldenfels, *Absolutes Nichts: Zur Grundlegung des Dialogs Zwischen Buddhismus und Christentum*, 1976.）。南山大学宗教文化研究所は、キリスト教と日本の宗教との対話、特に認識的側面と観的側面との接点を求める試みを続け、その研究成果を発表し続けている（南山宗文研編「絶対無と神」（春秋社 1981）。同編「天台仏教とキリスト教」<春秋社1988>）。

注 29 Xavier L.Dufour, *Vocabulaire de Theologie Biblique*, Les Editions du Cerf 1970 (英文 *Dictionary of Biblical theology*, 2nd Geoffrey Chapman, London 1973, "faith", p.158).

注 30 ibid. 有賀鉄太郎「キリスト教思想に於ける存在論の問題」（創文社 1969）258—9頁。

語構造)に、日本語としては珍らしく主格使用が多くみられることは、かかる内村の履歴に依拠するものである(本文・資料「内村に於ける *Intellectus Fidei* の言語構造」参照)。しかし、彼が「信仰の知解」の論証に於いてその論証の述語を「私は～を信じる」という定式へと帰着させ、「信仰」を「正直(せいちよく)」・「忠信(ちゅうしん)」・「真実(まこと)」・「誠実(まこと)」等「在り方」を示す「存在論」的用語に置換させ、以て論証を進めさせたことは、彼の思考発想の拠って立つ基盤が、ギリシャ思考的認識論に沿革をとる聖アンセルムスの思考発想とは異なるものであることを証示させている。内村はキリスト教信仰を受容しつつも、存在論的・非言語的(注31)である「『覺(悟り)』の発想」という最も日本の思想によって、「信仰の知解(*Intellectus Fidei*)」を理解しようとしたのである。

注 31 八木やヴァルデンフェルスは、仏教及びその影響を受けている日本思想には非言語的「覺」の立場がみられることを指摘している。キリスト教には宗教体験を言語化するあまり、それを突破して原体験に肉薄することに欠けるきらいがあることも、指摘されている。

八木誠一『パウロ・親鸞・イエス・禪』46頁。

H・ヴァルデンフェルス『絶対無』松山康国訳(法藏館 1986)24. 30頁(H.Waldenfels, *Absolutes Nichts zur Grundlegung des Dialogs zwischen Buddhismus und Christentum*, 1976.)。